

## 中国近代の文人と学術

——魯迅・郭沫若・聞一多——

牧角 悦子

### はじめに

二〇〇五年六月、二松学舎大学において、日本聞一多学会と日本郭沫若研究会との共催により、「中国近代の文学と学術」と題するシンポジウムが開かれた。

近代を代表する文人である聞一多と郭沫若は、時代を代表する文学者であると同時に、中国古典に関する優れた研究業績を残している。そしてそれは、この二人の文学者のみにとどまる傾向ではなく、同時期の多くの文人に見られる特徴でもある。このシンポジウムでは、近代という時代に、文学者たちが自己の表現を求める中で、創造の分野と学術の分野とをどのように切り結んでいたのかを、それぞれの視点から明らかにしようとしたものである。聞一多・郭沫若に限らず、魯迅や周作人らも含めて、その文学創作についての研究に比べて、学術の分野に対する視点は希薄なように思える。しかし、彼らの残した学術上の業績は、いまだに中国古典文学を研究する際に無視することのできない重要なものである。その古典研究の質と古典に対する問題意識を明らかにすることは、近代の文人のあり方を考える上で欠けてはならない視座ではないだろうか。

如上の趣旨のもと、シンポジウムでは二部会に分けて報告が行われた。第一部会では郭沫若研究会の会員から、郭沫若における近代及び文学の問題について報告が行われた。第二部会では聞一多学会の会員から、近代の文人とその古典研究についての報告が行われた。本論考は、第二部会の導入に当たって、近代の文人とその学術のありようについて、魯迅・郭沫若・聞一多を例として概論したものを纏めたものである。

### 一、魯迅の学術業績

学術の分野における魯迅の業績は、書物・論文・講演・雑論など多岐に涉り、また活字となって公表されていないものもある。ここでは主に『魯迅全集』<sup>(1)</sup>に収録された古典研究関係のものを対象とする。それらは大きく二つに分類される。一つは古書の整理校勘であり、一つは文学史研究である。まず、古書の整理校勘について概観してみたい。(書名の後の年代は、出版年、あるいは著述年代を表す)

#### 古書整理校勘

- 1、会稽郡故書雜集 一九一五
- 2、嵇康集 (一九一三〜一九三二)
- 3、唐代伝奇集 一九二七・二八
- 4、古小説鈞沈 一九二一

『会稽郡故書雜集』は、魯迅の故郷である会稽にまつわる文獻、特に先賢の行状記や地理書等を、古逸書の中から拾い集め一冊に纏めたものである。一九一五年という辛亥革命後比較的早い時期に出版されたこの書物について、魯迅自身はそれが酒や女の代わりの現実逃避であったかのような言い方もしてはいるが<sup>(2)</sup>、会稽という故地への深いこだわりと、綿密で辛抱強い資料収集や校勘作業は、それが民族意識と繋がるかどうかは別にして、やはり古文献に対する魯迅の強い思い入れと、学者としての校勘作業への情熱を表すものであることは間違いない<sup>(3)</sup>。

『嵇康集』の校勘作業は一九一三年に始められた。その後断続的に行われた校定は、最終的に一九三二年に終了する。この成果は魯迅の生前には日の目を見ず、歿後二〇周年を記念して一九五六年に始めて出版された。『嵇康集』の校勘は、『会稽郡故書雜集』にも増して多くの労力を必要とするものであった。それは緻密な校定や校本に対する知識、そして最後は校訂者自身の対象への共感と詩文への造詣を問われる極めて重たい仕事である。魯迅はしかしそれを孜孜として、また熱い情熱を持つておこなった。

『唐代伝奇集』および『古小説鈎沈』は、魯迅の小説研究の一環としてある。魯迅は中国の古典の中でも、とりわけ小説というジャンルに強い興味をもっていた。それは次に述べる小説史の構築にも繋がるものであるが、この二つの成果は、特に文語で書かれた所謂古小説を対象に、それを整理校勘したものである。

次に文学史研究について見てみよう。

### 文学史研究

#### 1、中国小説史略 一九二三

- 2、小説旧聞鈔 一九二六
- 3、漢文学史綱要 一九二六

『中国小説史略』は、北京大学における小説史の講義録に加筆修正を加えたものであり、一九二三年に上冊が、二四年に下冊が刊行された。それまで文学の範疇からは疎外されてきた小説というジャンルに、文学としての自律的価値を認め、その発生から展開に至るまでを具体的に論じたこの書物の持つ意義は大きい。

『小説旧聞鈔』は、小説史の講義に当たって収集した資料を整理分類したものであり、『中国小説史略』作成の副産物ともいえる。

『漢文学史綱要』は、一九二六年に廈門大学で中国文学史を講じた際の講義資料であり、出版は歿後の一九三八年、『魯迅全集』の中に収められた。この文学史は、日本の児島献吉郎『支那文学史綱』を下敷きとしており、章の立て方や視点などの多くの面において児島の説に乗っている。また、文学の発生から説き起こしながら、第十章の「司馬相如と司馬遷」までで終わっている。亡命とも言える転居先の不自由な環境の中で、資料不足に悩まされつつ書かれたものであること、また歿後にその遺稿が出版されたことなどから推して、この『漢文学史綱要』が未完の書物であることは否めない。しかし、大学の講義で文学史を教えること自体が、新中国の新しい學術の流れの一つの現われであること、そして魯迅がその中でも小説だけでなく詩文の主流についても、講義を通じて形を残そうとしたことは重要である。魯迅はこの書物の中で、最新の學術傾向に敏感に反応している。

魯迅のこれらの學術業績を総合して見たとき、その特性を以下の三つの点に纏めることができるであろう。まず第

一に、魯迅がきわめて正確な校勘作業を行ったということである。古書校勘の仕事は、そのどれをとつても趣味や韜晦の域を超え、専門家としての能力を十分に發揮しているといえる。

第二番目に、小説へのこだわりがある。それまで正統派の文学の枠外にあつた小説というジャンルに注目し、小説の生成発展の様相を歴史的に跡付ける作業を通じて、小説に文学としての自律的価値を見出した『中国小説史略』は、近代の小説研究の金字塔とも言つてよい。そしてまた、小説の文学としての価値付けに当たつて、それを文学史という歴史的視点に立つて展開したこと、時代と作品との相関の中から小説それ自体の持つ思想性を導き出したこと、これらは魯迅の学術の質の高さと読み取りの深さを証明するものでもある。

第三番目に、文学史的視点が挙げられる。古き良き時代を回顧する旧来型の文学観から脱却して、文学を独立した営みとしてとらえる視点は、胡適を始めとする所謂擬古派の新しい歴史観と同時にもたらされたものであるが、特に魯迅の場合は、小説研究においてその有効性が最も生かされているといえよう。

以上、魯迅の中国古典に関する学術的業績を概観してみた。次に、郭沫若の古典研究について見てみよう。

## 二、郭沫若の学術業績

郭沫若の学術業績は実に多岐に渉るが、その中心的なものを大まかに分類すると以下のようになるであろう。

### 甲骨学

#### 1、卜辞通纂 一九三三

金文学

- 1、 両周金文辞大系 一九三一
- 2、 両周金文辞図録考釈 一九三五

中国古代社会研究

- 1、 中国古代社会研究 一九三〇
- 2、 青銅時代 一九四六
- 3、 奴隸時代 一九五二

中国古代思想研究

- 1、 十批判書 一九四五

いま、これら全ての業績に説明を加えることは筆者の力及ばぬ所であるが、その代表的なものについて概観してみたい。

まず、甲骨学であるが、この分野において郭沫若の残した功績は甚大である。代表的な業績として『卜辞通纂』がある。これは董彦堂『甲骨文断代研究例』を基にして、それを発展させたものである。卜辞に見える干支・数字・世系・天象・食貨・征伐などに関する文を網羅整理したもので、それぞれの卜辞を検索するのに極めて便利な書物である。

金文学では『両周金文辞大系図録考釈』がその代表として上げられる。両周の青銅器を周・宋・楚などに分類し、それぞれに器影・銘文拓影と詳細な釈文を付したものであり、現在でも金文学の入門書として価値が高い。

これら郭沫若の金文・甲骨文など古文字に関する研究は、かれの学術業績の中でも特に高く評価されるべきものである。

中国古代社会研究は、古文字研究と並んで、郭沫若の学術のもう一つの重要な柱である。古代に対する視点が、近代になって新しく開かれたことについては、拙論「中国神話学の夜明け」<sup>(4)</sup>の中で神話学の系譜を通じて論じたことがあるが、郭沫若は特にその流れの中にあつて、社会制度史的視点から古代史を分析したことが最大の特徴である。『中国古代社会研究』一書は、モルガン・エンゲルスの民俗学や社会学を参考にしつつ、殷・周社会の実相を甲骨文・金文・『易』・『詩経』などの先秦文献を駆使して明らかにしようとしたものであり、『青銅時代』『奴隸制時代』の先駆を為す研究書である。中国古代をその社会構造を分析することから明らかにしようとした視点は新しいが、しかし現在では新出の考古資料などによって、その学説は有効性を欠く部分が多い。また、本書の中で、胡適を批判し、羅振玉・王国維を高く評価しているのは面白い。

中国古代思想の研究としては『十批判書』が早期ながら充実している。これは、「古代研究の自我批判」に始まり、孔墨・儒家八派・黄老学派・莊子・名弁・前期法家・韓非子・呂不韋と秦王政の批判」まで、それぞれ例文を引き、詳細に分析し批判を加えたものである。この書は郭沫若自身が後書きの中で「先秦以前の資料はほとんど徹底的に洗い尽くした」と述べるごとく、諸子百家を対象とした優れた研究といえよう。因みに貝塚茂樹『諸子百家』（岩波書店）は、この『十批判書』に拠って著された。

これら郭沫若の学術研究の特徴は、伝統的な文献考証学に則りつつも、それに加えて社会思想史という視点を持ち

込み、文化や思想の背景にあった制度や社会を重視した点である。

郭沫若の研究業績はその分野も多岐に渉り、また執筆時期も非常に多様である。今回はその要点と特徴についてのみ概論するに止めたい。

### 三、聞一多の学術業績

聞一多の学術業績は、唐詩研究と中国古代文化・文学研究がその中心である。それらを項目ごとに分類すると以下のようになる。

#### 唐詩研究

- 1、律詩的研究 一九二二
- 2、類書與詩
- 3、宮体詩的自贖 一九四一
- 4、四傑 一九四三
- 5、孟浩然 一九四三
- 6、賈島 一九四一
- 7、少陵先生年譜会箋 一九三〇
- 8、岑嘉州繫年考証 一九三三



9、杜甫

詩經研究

- 1、詩經的性欲觀 一九二七
- 2、風詩類鈔 一九三三
- 3、卷耳 一九三五
- 4、詩經新義 一九三七
- 5、詩經通義
- 6、詩新台鴻字說 一九三五
- 7、匡齋尺牘 一九三四

楚辭研究

- 1、讀騷雜記 一九三五
- 2、離騷解詁 一九三六
- 3、怎樣讀九歌 一九四〇
- 4、九歌兮字代釈略説 一九四〇
- 5、什麼是九歌 一九四一
- 6、楚辭校補 一九四二

- 7、九歌校釈 一九四四
- 8、九歌古歌舞劇懸解 一九四五

上古文学史研究

- 1、歌與詩 一九三九
- 2、易林瓊枝 一九三九
- 3、文学の歴史動向 一九四三
- 4、中国上古文学 (未刊手稿)
- 5、七十二 一九四三
- 6、道教的精神 一九四一
- 7、神仙考 一九四一

神話研究

- 1、高唐神女伝説之分析 一九三五
- 2、姜嫄履大人跡考 一九四〇
- 3、伏羲考 一九四一
- 4、道教的精神 一九四一
- 5、高唐神女伝説之分析 一九四二

6、龍鳳 一九四四

7、説魚 一九四五

その他

金文、契文、卜辞研究・莊子・周易・管子

唐詩研究の中では『少陵先生年譜会箋』が最も優れた成果であろう。杜甫に関する詳細な年譜として、現代に至るまでその価値には揺るぎ無いものがある。また、初唐の四傑や賈島についての論考には、唐代の文学を文学史的観点からとらえ直そうとする意図が感じられる。唐詩に関する研究は聞一多の研究史の中では比較的早い時期のものであり、昆明への疎開以後は、その中心が中国古代研究に移っていく。

『詩経』に関する研究の中では『詩経新義』が重要である。清朝考証学の系統を引く正確な訓詁に基づきつつ、古文字学や文化人類学を導入した斬新な切り口によつて『詩経』学における長年の蒙を大いに啓いたその成果は、現在においても看過することのできない重要文献の一つとなっている。なお、聞一多の詩経研究については、拙論「聞一多の詩経研究」「想像の歯車」<sup>(5)</sup>をご参考いただきたい。

『楚辞』は、聞一多がその最晩年に至るまで、特別の情熱を注ぎ込んだ研究対象である。それはひとり学問の対象としてのみならず、聞一多自身の演劇芸術への思い入れとも相俟つて、文学、或いは表現そのものへの渴望を満たす対象として、彼の様々な業績に結実した。学術的に最も価値の高いものは、『楚辞校補』である。洪興祖の『楚辞補注』を定本とし、六十五種にのぼるテキストの校勘と古代文献の涉獵に基づきつつも、文意を貴ぶ新しい視点から施

された校釈は、大胆ながら説得力に富むものが多い。また『楚辞』各篇の中でも、特に九歌に関する多くの業績があるが、『九歌古歌舞劇懸解』は、九歌を実際に舞台上で演じることを目的として書かれた脚本である。

神話研究について言えば、そのどれをとつても、新しい古代学・神話学の黎明を告げる優れた論考だと言えることができる。聞一多の神話学については、拙論「中国神話学の夜明け」<sup>(6)</sup>を参考いただきたい。

これらの聞一多の学術成果を通じて言えることは、まず文字学では仮借を重視した緻密な文献考証学がその基礎として有ることである。そして更に民俗学・文化人類学などの新しい視点を自在に応用し、特に古代という時代について想像性豊かな研究業績を残していることである。また、文学、特に「詩」の発生と展開について、文学史的視点から新しい価値付けを試みていることもその特徴として挙げられる。

#### 四、三者の学術研究の特性

以上概観してきた魯迅・郭沫若・聞一多三者の学術業績を通じて、そこに共通する幾つかの特性について考えてみたい。

#### 文献考証の重視

まず、三者の共通点として、文献考証学の重視があげられる。それぞれが中国の古典と向かい合う際に、長い歴史と実績を誇る文献考証という基礎学問を、決して蔑ろにしていなければか、寧ろ積極的にそれを活用している。

魯迅と浙東学派の史学との関係は、夙に阿英が『中国小説史略』<sup>(7)</sup>について「<sup>(7)</sup>の中で指摘しているが、その学術の

背景に故地会稽や浙江の長い学問の歴史があり、魯迅の学問にもそれらが伝統意識をともなつて流れ込んでいたことは否定できない事実としてあるであろう。また、章炳麟を師として学んだ小学の影響も、その学術に反映しているかもしれない。清朝の学術の中でも、これら歴史学と文字学の薰陶を十分に受けた最後の文人としての魯迅の学術という視点も成り立つのかもしれないが、この問題については今は深入りしない。ただ、上に見た魯迅の学術成果が、伝統的な学問方法の精華を十二分に受け継いだ、地盤の固いものであったことだけは十分に認識されなければなるまい。同じことは郭沫若・聞一多にも言える。かれらの文献考証学はいずれも前の時代の優れた学術方法を吸収したものであり、その上に新しい近代的な方法論を持ち込んだところに特徴がある。郭沫若と聞一多の場合は、胡適や顧頡剛を中心とする擬古派の古代学から直接間接にその影響を受けているであろう。それはまた五四新文化運動による新しい文化・思想の流入や、三皇五帝への回帰的な歴史観から脱却し、伝統的な価値観から自由になった学術の大きな潮流の中に位置付けられるべきものでもあろう。

この近代における新しい学術潮流については、拙論「中国神話学の夜明け」の中で神話学を通じてそれを論じたことがあるが、その最も重要な特徴として、五四新文化運動による新しい思想文化の流入と並んで、彼らが清朝考証学に代表される伝統的学問方法をその基礎として確実に身につけていたことが挙げられる。魯迅はその近代学術の先駆けであり、郭沫若・聞一多は、最も着実な成果をその中から生み出した世代である。

### 新しい視点

硬質な考証学に基づきつつも、前時代の学術の旧套を打ち破ることのできた彼ら三者に共通するいまひとつの特徴

は、学術研究に新しい視点を持ち込んだことである。魯迅の場合、それは小説というジャンルにおける文学性の発見であり、それを跡付けた文学史的視点である。郭沫若・聞一多の場合は、モルガンやハリソンによって提唱された欧米の文化人類学の応用、そしてエンゲルスの社会思想的視点の導入として現れる。これらは、既成の価値観が覆され、西欧文明が新しい価値として流れ込んだ近代という時代背景と、それを敏感に自身の学術に応用した三者の才覚とが合致した結果としてとらえられよう。

「文学史」という視点の導入は重要である。それまでの回顧的一元論的文学観から離れて、中国の文学をその自律的成長の過程としてとらえる「文学史」の視点は、日本のシナ学者の中国文学史に大きな影響を受けたものである。が、同時にまた清末から盛んに説かれた小説重視の思潮や、嚴復の進化論（正確に言うところの翻譯によってもたらされたハクスリーの「進化と倫理」に基づく進化論）からの影響も大きいのではないかと思われる。

魯迅の『中国小説史略』は、小説を文学として評価したという意味で画期的研究であると同時に、その発生から説き始めて各時代の様相を歴史的に追っていく文学史的視点の導入という点においてもまた、近代の学術史の中で極めて意義深いものといえる。北京大学に文学史の講座を開設したのは蔡元培の発案であつたが、それを実際に行いうる力量を持った学者は、そう多くはなかつたに違いない。特に対象が小説となると尚更である。魯迅は『中国小説史略』の序言に「中国の小説は、これまで歴史的記載をもたなかつた。あつたとすればそれはまず外国人の作つた中国文学史の中に見え、その後中国人の作つた文学史のなかに見えるようになったものである。だからその量はどれも全書の十分の一に及ばない」と記すが、それは文学史的視点がそれまでの中国の研究には希薄であつたことを語ると同時に、この書物こそその嚆矢であることの宣言ともいえる。その意味で『漢文学史綱要』もまた、おそらくこの『中国小説史略』と対を成す、詩文を対象とした文学史になるはずのものであつたのではないかと思われるが、しかしこち

らは未完のままに終わってしまった。

聞一多もまた文学史という視点を自覚的にその学術に取り入れた。それらは形として結実することはなかったが、しかし中国の文学の大きな流れを体系的に語ろうとした講義の準備ノートと構想とは、数編の論文と、歿後の遺稿として残された。これらの草稿から分ることは、聞一多の文学史研究が、その中心を古代という時代と詩というジャンルとに置き、詩の発生と展開とを独自の観点から解き明かそうとしていたことである。一九三九年に書かれた「歌と詩」は、彼の中国古代文学史構想の第一段であった。そこには中国古代における「詩」の意味が、その発生において所謂ポエジーとは異質のものであったことが証明され、この論文が、「詩」が時代と共に変化発展していく様を跡付けようとする試みの第一歩であったことが分る。

郭沫若と聞一多の学術の大きな特徴である文化人類学その他の欧米の学問方法の導入は、とりわけ彼らの古代学の分野において大きく役立っている。それまで経学的学問の世界では神聖視されていた古代という時代を、独自の価値体系の中から再評価した彼らの古代学は、その後修正を迫られる部分があるとは言え、近代学術の大きな成果の一つとすべきものである。

### 創作との関り

今回とり上げた三者は、いずれも学術の世界だけでなく、文学作品創作の分野においても近代を代表する文人であることは言を待たない。最後に、彼らの学術がその創造活動とどのように関りあっていたのかについて考えてみたい。魯迅において、学術と創作の関りといえ、やはり小説であろう。魯迅の創作活動の中心が小説なのか評論なのか

について、筆者は判断しかねるが、魯迅の学術における小説へのこだわりが、その小説創作と無関係とは考えられない。ある意味、時代の要求を反映しながら歴史的に推移して来た小説の、近代における発展形態の現われとして、自身の小説創作があつたとも考え得る。魯迅の小説は、純粋な創造はもとより、自伝的回想・翻案・感傷などその形態は様々である。歴代の小説を緻密にそして正確に読みこなしてきた魯迅の自らの創作に、それらが反映していないと考える方が難しいのではないだろうか。また、評論の分野における、着実な論理構造に支えられた切り口鋭く且つ粘着力の強い論理的思考は、嵇康特有の逆説論理と共通するものがある。魯迅が多大な情熱を注いで行つた『嵇康集』の校勘は、同じく生き辛い時代を知識人の苦悩を背負つて生き抜こうとした嵇康への、強い共感と共鳴から生まれたものではなかつただろうか。

魯迅は、その古典や典籍への没入を「自己麻醉」、あるいは現実逃避であつたかのように表現している<sup>(8)</sup>。そして近代の文人において古典研究は、その創作よりも一段地歩の低いものと見做される傾向がある。しかし、このように考へてきた時、魯迅において古典との関係は、決して自己麻醉や現実逃避といったような消極的なものではなかつたことは確かな事実として言えるであろう。

次に、郭沫若における古典と創作の関係であるが、筆者は十分にそれを語る資格を有しない。限られた理解の範囲で述べれば、特に古代の神話や屈原をテーマとした創作が、その学術的研究と並行して存在していることがある。ただ、郭沫若の場合、研究と創作とは全く違ったスタンスのもとに行われている傾向があるかのように感じられる<sup>(9)</sup>。これは次に述べる聞一多の場合との大きな相違である。

聞一多の年譜を書いた朱自清は、その閲歴を、詩人の時代、学者の時代、闘士の時代と三つの時期に分ける。それは、聞一多が三十年代そこそこで詩の創作を止めて、学問の世界に没入し、そしてまた最晩年にはまた取り付かれたよ



うに民主化運動に傾倒していくその変化があまりにも顕著であるからだ。しかし、詩の創作と古典研究とが、実は詩人の内部では決して断絶してはおらず、聞一多が死ぬまで詩人として一貫していたということについては、その『詩経』研究の足取りと、最晩年の民主運動との関連からかつて詳論したことがある。<sup>(10)</sup> 簡単に結論を言えば、その表面上の現われとしては、聞一多は詩人から古典研究の学者へと変化してゆくが、彼の学者としての業績の背後には、詩人としての想像的な感性の豊かさが最も重要な要素の一つとしてあったということである。聞一多において、詩の創作と古典研究とは決して対立するものではなく、その学術業績もまた彼にとつては自己表現の一つの手段と言ってもよいものであった。

以上、三者三様に展開される創作と学術業績との関りから明らかになったことは、彼らにとつて創作と学問とは、決して矛盾したり、或いは対比的関係としてとらえられるものではなく、そのどちらにも自身の嗜好と特性に基づいた、熱い情熱が注がれたものであったということである。近代の文人たちにとって、創作と学術とは相関し合うものであり、創作の背景には学術が、学術の背景には創作の世界が、互いに強く影響を及ぼしあっていた。そしてそれがまた近代学術が大きな成果をもたらした一つの原因であると同時に、近代の文人のあり方の大きな特徴の一つだとも言えるのではないだろうか。

## 注

- (1) 人民文学出版社『魯迅全集』十六卷（一九八〇年）に拠る。

- (2) 一九一〇年一月二四日付け許寿裳あての書簡に「此非求学、以代醇酒婦人者也」と。
- (3) 魯迅の古典研究、特に古書校勘の作業については、それを彼の中国人としての民族意識に結び付けて解釈する者もいる。それが民族意識に基づくということを一概に否定はできないが、しかしそれは第一要因ではないと筆者は考えている。
- (4) 牧角悦子「中国神話学の夜明け——近代中国の學術と顧頡剛・聞一多の古代学——」日本聞一多学会報『神話と詩』三二〇〇四年。
- (5) 牧角悦子「聞一多の詩経研究——創造と古典研究を結ぶもの——」二松学舎大学『人文論叢』六七 二〇〇一年、同「想像の齒車——聞一多の詩経研究——」日本詩経学会『詩経研究』二六 二〇〇一年。
- (6) 注(4)に同じ。
- (7) 阿英「關於『中国小説史略』」一九五六年。
- (8) 『呐喊』自序において、小説創作に至る経緯を記す中で、碑文を写す作業は「自己麻醉」だと言っているのがその端的な例である。
- (9) この点については、横打理奈「郭沫若『女神』にみる神話回帰の態度」(日本聞一多学会報『神話と詩』三二〇〇四年)に詳しい。
- (10) 牧角悦子「聞一多の詩経研究」注(5)、同「詩人の軌跡——聞一多晩年の民主運動と文学観——」創文社『中国読書人の政治と文学』二〇〇二年

※ 魯迅と古典との関りについては、林田愼之助『魯迅のなかの古典』(創文社・昭和五六年)及び学習研究社『魯

迅全集』一一・一二の解説（今村与志雄『中国小説史略』について）・伊藤正文「鲁迅の古典研究の一側面」・小南一郎『唐宋伝奇集』について）を参考にさせていただいた。

※ 本論文は平成十六年度二松学舎大学東アジア学術総合研究所補助費（研究課題「楚辞研究の現状と課題」）の交付を受けた研究成果に基くものである。

